国語

（古文・漢文を除く）

2025年10月18日実施

100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

2026年度

●総合看護学科
一般２期入学試験問題
●理学療法学科・作業療法学科
一般２期入学試験問題

〔注意事項〕

1　合図があるまで，この冊子を開いてはいけません。

2　この冊子は29ページあります。問題は第１問～第２問まであります。

3　ページの脱落や印刷不鮮明な個所を見つけた場合には，すみやかに申し出て下さい。

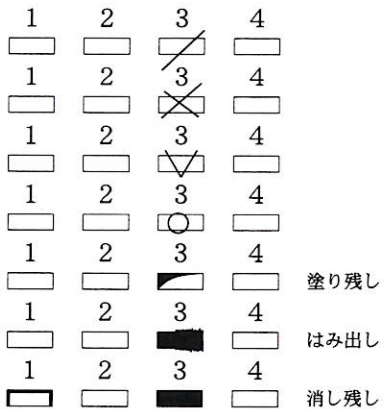
4　解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては，受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。

5　解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり，薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば，問題の文中または文末等に 35 の表示のある問いに対する解答は，下の（例）のように解答番号　35　の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際，解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

（例）

解答番号	解答記入欄			
35	1	2	3	4

（悪い例）



6　解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから，〔注意事項〕を正しく守って下さい。とくに，訂正する場合には消しゴムでていねいに消し，消しくずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	

国語

（解答番号 1 ～ 26）

第1問

次の文章を読んで後の設問（問1～8）に答えなさい。

ある民間の病院では、看護師を含めた職員の中から毎年、最も模範となるような職員を院長が選び、ＭＶＰ（最優秀職員）として表彰している。そして受賞者には、院長からかなり高額の賞金が贈られる。

ところが、なぜか受賞者の多くが受賞後、比較的短い期間に辞めていくそうである。はりきって働き続けてもらうために表彰制度を取り入れたはずだが、(1)皮肉にもまったく逆効果になっているわけである。

この話を聞いたとき、私は原因として三つの可能性があると考えた。

一つは、表彰されたくらいだから自分は市場価値が高いと思い込み、より(ア)待グウのよいところへ転職していった可能性である。しかし、明らかになっている情報で判断するかぎり、その可能性は低いようだ。

二つ目は、周囲からのねたみに耐えられなかったのではないかという(イ)カ説である。たしかに一部では、「ＭＶＰだからそれくらいやりなさいよ」と言われたという声も漏れ聞かれたそうだ。しかし、たいていの受賞者は優秀かつ勤勉なので、そうした嫌みを言われるのはむしろ例外だろう。

そこで考えられるのが、三つ目の可能性だ。その謎を解くヒントは、私たちがしばしば経験する次のようなシーンにある。

「ＰＴＡの役員なんか絶対に引き受けるものか」。そう誓って、しぶしぶとＰＴＡの総会に出席した。開会のあと、いよいよ会長を選出する次第になると案の定、だれもが下を向いて自分に声がかからないことを祈っている。そのとき突然、ある人が「人望の

ある〇〇さん（自分）をぜひ推薦したい」と発言した。すると、あちこちから賛成の声があがる。そうなると絶対に引き受けないという決意が揺らぎ、やがて「まあいいか」という気持ちになる。結局当初の誓いはどこへやら、いちばんたいへんな会長の役を引き受けてしまった。

そして会長になると周りから「会長」「会長」と持ち上げられ、頼りにされる。それは心地よいし、けっこうやりがいもある。気がつけば仕事も家庭もそっちのけでのめり込んでいて、あちこちにしわ寄せが出ている――。(2)その裏返しのような出来事もある。

知人から聞いた話だが、映画館のチケット売り場で初老の紳士が、すました顔で女性スタッフにチケットを注文した。女性スタッフは気を利かせて（？）「六〇歳以上の方はシニア割引が利用できますが・・・」と言った。すると男性は急に血相を変え、「いらんこと言うな」と怒鳴ったそうだ。横で聞いていた知人は、おかしくて吹き出しそうになったという。男性はささやかな承認欲求が満たされなかったばかりか、取り乱して(ウ)シュウ態をさらし、思わぬ「負の承認」を受けたのだ。

一方では皮肉なことに、認められることに飢えてきた人が、念願叶(かな)って認められると、こんどは認められたがゆえに苦しむケースもある。

五〇代のある女性は、中年にさしかかって以来「若く見られたい」という切実な思いを抱き続けてきた。若さを保とうと頻繁にエステやスポーツジムへ通い、ヘアスタイルや服装も実年齢より一〇歳から二〇歳程度若づくりしていた。そうした努力が実を結び、引っ越した先の近所やスポーツジムでは、四〇歳そこそこに見られるようになった。いわゆる「美魔女」である。

ところが、だんだんと「ほんとうの年を知ったら幻滅するのではないか」という不安にとらわれはじめた。そして、人と会うのがおっくうになっていった。(3)やがて彼女は、家のなかに閉じこもりがちになってしまった。

二〇一八年九月、私の授業を受けている学生（大半が大学二年生）に対してアンケートを行い、「他人から認められたり、社会的に評価されたりしたことがプレッシャーになった経験はありますか？」と質問した。すると回答した二六七人のちょうど三分の

一に当たる八九人が、「ある」と答えた。

二〇歳に届くか届かないかの若さで、まだ社会に出る前にもかかわらず、これだけの学生が「承認欲求の呪縛」を経験し、それが脳裏に焼き付いているわけである。

では、実際にどのようなケースがあるのか。

ある男子学生は小学校から中学校まで無遅刻無欠席を続けていた。親はそれが何よりの自慢で、近所にも言いふらしていた。ところが高校に入るとだんだんとそれが負担になり、学校に行くのが嫌になってしまった。

そしてあるとき、ついに学校を休んで公園をフラフラと散歩した。それが親にばれると、叱られたわけでもないのにもう学校に行けなくなり、欠席が続いて卒業さえ危ぶまれるようになったという。

また、ある女子学生は水泳が得意で中学時代には地域の記録をたびたび塗り替え、大会でも勝ち続けていた。それとともにコーチの期待は高まり、次は県大会、その次は全国大会というように目標が高くなっていった。しかし、だんだんと自分のためでなくコーチのためにがんばっているのではないかと感じるようになり、コーチの期待と反比例するように泳ぐことの楽しさは失われ、競技の成績も落ちていった――。

幼いころは絵が得意だったが、先生にほめられているうちに少しずつほめられることを意識し、個性が消えてしまったとか、勉強でもクラブ活動でも(4)ほめられているうちに「指示待ち」になったという声もたくさん聞かれた。

クラブの部長や生徒会の役員に選ばれ、リーダーにふさわしい振る舞いをしなければならなくなった。それに大きなプレッシャーを感じたという学生も想像以上に多い。

ときには、それが取り返しのつかない悲劇につながる。ある学生の友人（女子）は高校時代、生徒会長に選ばれるなど周囲からの人望が(エ)アツく、教師や友人からとても頼りにされていた。しかしその友人は内心、それを重荷に感じており、彼女はときどきその学生に気持ちを打ち明けることがあったという。その友人が突然、自ら命を絶ってしまった。それだけ悩んでいたのならもっ

と助けてあげられたのではないかと、いまでも後悔しているそうだ。付け加えておくと、まったく同じようなケースをほかでも聞いたことがある。

近年、教育の現場では、子どもたちの自己肯定感や自尊感情の低さが問題視され、児童・生徒をほめて育てようという気運が高まっている。実際にその効果はあらわれはじめている。

（　Ⅰ　）、効果があるだけに副作用も大きい。一般にほめるのはよくて叱るのは危険だといわれるが、受け止め方によっては叱るより、（　Ⅱ　）ほめるほうが危険な場合もある。叱られたら反発する子も、ほめられたら否定することが難しいからだ。

ここにあげた具体的な事例からも、周囲の期待が「承認欲求の呪縛」をもたらす一つの要因だということを理解してもらえたと思う。（　Ⅲ　）、正確にいうと、本人がその期待をどれだけ意識しているかが問題であり、実際にどれだけ期待されているかが問題ではない。したがって、それを「認知された期待」と呼ぶことにしたい。

しかし、いくら「認知された期待」が大きくても、やすやすと応えられるなら何も問題はない。呪縛に陥るかどうかは、本人がその期待からどれだけプレッシャーを受けているかによる。

いずれにしても、[5]「認知された期待」から受けるプレッシャーこそが「承認欲求の呪縛」の正体だといえる。

こうしてみると、ある病院でＭＶＰ表彰を受けた職員が次々と離職した理由もおおよその想像がつく。おそらく「期待に応えなければいけない」というプレッシャーが、それ以上働き続けるのを困難にするほど大きく感じられるようになったのだろう。

他人からみると、本人が勝手に期待の重みを背負っているだけであり、気にしなければよいと思うかもしれない。しかし、やっかいなもので気にしないようにしようと努めたら、逆に意識がそこへ集中し、いっそう事を重要視するようになる。

名著『夜と霧』の著者であり、精神科医、哲学者でもあるＶ・Ｅ・フランクルは、人間存在の意味を追求する「ロゴセラピー」[※注]を説き、関連してこう述べている。「恐怖症と強迫神経症の病因が、少なくともその一部は、患者がそれから逃れようとしたり、それと戦おうとすることによって起こる不安や強迫観念の増大にあるという事実に基づいている」と。

このような現象を「精神交互作用」[6]と名づけたのが、「森田療法」で知られる医学者の森田正馬（まさたけ）である。森田によると、そもそも神経症の不安や葛トウ[オ]は正常な人にも生じる心理状態であり、自分にとって不都合な弱点を取り除こうと努力するほど、その意に反して自分に不都合な神経症の症状を引き出してしまう。要するに「期待を裏切ってはいけない」という意識が心のどこかにあるかぎり、その不安を取り除こうと意識すればするほど、まるでアリ地獄のように負のスパイラルに陥っていくのである。

そういうとき、不安を取り除いてやろうとする周囲の努力が、ときにはかえって本人を追いつめてしまう。よくあるのが、次のようなケースだ。

わが子が高校や大学を受験するとき、親は自信を持たせようと思ってつい、「絶対大丈夫だから」と声をかけて送り出す。ところが、そう言われたからといって自信をもてるわけではない。自信がないときには、むしろ絶対大丈夫だと思われているのに落ちたらどうしようと考えてしまう。落ちたら親を落胆させるだろうし、自分もひどくショックを受けるに違いないというようにネガティブな思考に陥るのだ。

そして先ほどの「精神交互作用」が働き、考えれば考えるほど、落ちてはいけないというプレッシャーが強くなる。その結果、実際に力を発揮できない場合が少なくないのである。

（太田肇『「承認欲求」の呪縛』より）

※注 ロゴセラピー……人が自らの「生の意味」を見出すことを援助することで心の病を癒す心理療法のこと

問1　傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に適する漢字を、各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 1 ～ 5

(ア) 待グウ　1　【①偶　②隅　③遇　④寓】

(イ) カ説　2　【①架　②借　③過　④仮】

(ウ) シュウ態　3　【①醜　②臭　③愁　④囚】

(エ) アツく　4　【①熱　②篤　③暑　④厚】

(オ) 葛トウ　5　【①頭　②到　③藤　④闘】

問2 空欄（Ⅰ）～（Ⅲ）、及び二重傍線部（═══）について、各問いに対する答えとして最も適当なものを、それぞれ①～④のうちから一つずつ選びなさい。

解答番号は 6 ～ 7

○ 空欄（Ⅰ）～（Ⅲ）に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを一つ選びなさい。 6

① 【 Ⅰ だから　Ⅱ かえって　Ⅲ もちろん 】
② 【 Ⅰ ところが　Ⅱ つまり　Ⅲ なぜなら 】
③ 【 Ⅰ ところで　Ⅱ たとえば　Ⅲ たとえ 】
④ 【 Ⅰ しかし　Ⅱ むしろ　Ⅲ ただし 】

○ 二重傍線部「まるでアリ地獄のように」とあるが、それはどのような状況を喩(たと)えているのか。最も適当なものを一つ選びなさい。 7

① 解決の糸口が見出(みいだ)せないまま手をこまねいている状況
② 抜け出そうと足掻(あが)いても容易に抜け出せない状況
③ 次々と周囲を巻き込んで迷惑をかけている状況
④ 恐怖を感じるあまり身動きが取れない状況

問3 傍線部(1)「皮肉にもまったく逆効果になっている」とは、どのような事実を指しているのか。その答えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は **8**

① 表彰制度導入により、いくらか働きづらくなる者が出てくるという予想はあったが、思いの外、その数が多かったこと

② 職場のチームワークを高めようというねらいで導入した表彰制度が、思いの外、職場の雰囲気を損ねてしまったこと

③ 被表彰者にリーダーとしての自信を持たせるつもりだったが、結果的に働くことに対する自信喪失につながったこと

④ 就労意欲を高めようとするねらいで導入した表彰制度が、結果的に被表彰者が離職する事態を招いてしまったこと

問4　傍線部(2)「その裏返しのような出来事もある」とあるが、「裏返し」という表現から、この傍線部の前と後の具体例は、どのような意味で置かれているのか。その答えとして最も適当な組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は **9**

①【　前……他者の評価によって行動に変化が現れた例　　後……他人の評価によって身の置き所を失った例　】

②【　前……他者からの評価によって一種の満足感を覚えた例　　後……他人からの評価に著しい不満を覚えた例　】

③【　前……他者からの評価を素直に受けとめなかった例　　後……他人からの評価をそのまま受けとめた例　】

④【　前……他者の正しい評価に心地よさを感じた例　　後……他人の誤った評価に怒りを覚えた例　】

問5 傍線部(3)「やがて彼女は、家のなかに閉じこもりがちになってしまった」とあるが、このときの「彼女」の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 10

① 「若く見える」という評価を得たものの、自分の承認欲求は満たされてはおらず、どうやって自分の在りのままの姿を理解してもらおうかとあれこれ思い悩んでいる

② 「若く見える」という評価を得て、一旦承認欲求は満たされたが、その後は、他人と会うことでその評価を失うのではないかと恐れ、身動きが取れなくなっている

③ 「若く見える」という評価はやがて失われていくことを悟っているので、できるだけ長く今の評価を保っていくための手段として、人と会うのを避けている

④ 「若く見える」という評価で得られたものは、それまでの自分の努力に比べれば小さなもので、心の中では承認された喜びより失望の方が大きくなっている

問6 傍線部(4)「ほめられているうちに「指示待ち」になった」とあるが、この部分はどのようなことを述べているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 11

① 自分らしく振る舞い、その結果として周囲からも評価されてきたのに、いつのまにか周囲の価値観に合わせた振る舞いをして自分らしさを失っていくこと

② 周囲の状況と関わりなく、自分の思うままに振る舞ったことで得られた成果に満足し、他者から指摘されるまで不適切な自分の振る舞いを正せないこと

③ 周囲からの期待に応えようとして振る舞ってきたのに、いつのまにかその期待を感じ取れなくなり、人の顔色をうかがいながら振る舞うようになること

④ 自分が他者の評価に合わせて振る舞うことに何の疑問も感じていなかったのに、いつのまにか自分らしい振る舞いを求められて困惑していること

問7 傍線部(5)「「認知された期待」から受けるプレッシャーこそが「承認欲求の呪縛」の正体だ」とあるが、ここに述べられている筆者の主張とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 12

① 人間誰しも、他者から認められたいという承認欲求によって苦しみを覚えるが、その苦しみから抜け出すことは容易ではない。同時にそれは周囲の期待に応えていかなければならないという精神的な負担をもたらす。ところが、逆に周囲の期待がそれ程のものでないなら、かえって自分は認められていないという苦しみは増大していく。

② 人間はずっと承認欲求を持ち続けるものではないので、他者の承認を得られた瞬間に、それまで抱いていた承認欲求はすぐにしぼんでしまう。ただし、周囲から再び期待を寄せられれば、承認欲求は甦ってくる。したがって、周囲からの期待を大きいものだと感じれば感じるほど、それに応えようとする気持ちは高まっていく。

③ 人間誰しも他者から認められたいという承認欲求を持っており、また、一旦他者から受けた承認を手放すことも容易ではない。当然、周囲からの期待を意識することの底には承認欲求がある。したがって、周囲からの期待が大きく容易に達成できないものであると感じた場合に、人は精神的に追い込まれてしまう。

④ 人間の承認欲求には際限がないので、一旦他者からの承認を得ても満たされた気持ちになることはない。だから、自分の精神の安定を図るためには、自分の心の中に潜む承認欲求を自覚し抑え込むことが大切である。しかし、承認欲求を抑え込もうとするほど、人は行き詰まりを感じるようになってしまう。

問8 傍線部(6)「精神交互作用」とあるが、筆者は、大学や高校の受験においては、どのような点が「精神交互作用」に当たると述べているのか。その答えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 13

① 受験に対する不安を払いのけ、リラックスさせてやろうとする周囲の配慮を意識することと同時に、周囲の人々の不安が募っていることまでも感じ取ってしまう点

② 受験に失敗するかもしれないという不安は消そうとしても消せはしないと自覚すると同時に、周囲の期待に背いて失敗することを恐れる気持ちが高まっていく点

③ 受験に対して前向きに取り組ませようと思い、周囲の人は励ましの言葉をかけてくれるが、逆にその励ましが受験から逃避したいと思う心につながってしまう点

④ 受験に失敗するかもしれないという不安を意識するまいと思えば思うほど、逆に周囲の期待に背いてはならないという意識が高まり、一層不安が募っていく点

第2問

次の文章は、海外で亡くなった方の遺体を運ぶ仕事をしている国際霊柩送還士について書かれたノンフィクション小説である。作者は、国際霊柩送還の仕事を担う株式会社エアハース社長「利恵」を中心に取材している。これを読んで後の設問（**問9**～**15**）に答えなさい。

エアハースの遺体の処置に、永遠を希求する姿勢を見ることはない。生前の姿に比べ、血色をよくするわけでもなく、生前より華美な化粧をすることもない。生前そのままの姿であることを彼らはあくまで追求する。

「おかえりなさい。よく帰ってきたね」と呼びかける姿を見れば、処置が永遠に失われない体を手に入れるためのものではないことは、日本文化の中で育った人ならすぐに気づくだろう。

私は、彼らの姿に哲学者の梅原猛が日本人について書いたある文章を連想する。梅原は著書『日本人の魂』の中で、古代日本人は「死」を体から魂が分離すること、と捉えていたとしている。そして、こう記しているのである。

「魂こそは生あるものを生あらしめるものであるが、死はこの魂が生あるものから去ることを意味する。魂が生あるものから去るがゆえに、それは死ぬのである。それゆえに古代人は、人が死に、魂がその体から去るのを見届けると、しきりに魂を呼び返そうとしたのである。それが魂呼びである」

私は利恵が遺体に向かって呼びかける姿を見た時、あるいは利幸が処置をしている時のあの形相や、慎太郎の手つきを思い出す時、彼らが遺体を永く保存しようとか、より完璧な形で人工的に復元しようなどと思っているのではないと感じていた。

(1) 魂呼び。私は、彼らの姿に名をつけるとするなら、この呼び名がぴったりと合うような気がするのである。

梅原猛は続ける。

※注1
「『記紀』などを読むと、天皇が死ぬと『もがり』ということが行なわれて、もがりの期間が一ヵ月も二ヵ月もあることがわかるが、このもがりというものは魂を呼び返す期間なのである。おそらく残された家族は一心に死者の魂がもう一度死者の体に戻ることを願ったのだろう。おそらく魂呼びは特定の霊能者に任せられていた仕事であったのであろう。霊能者たちが必死になって魂を呼び、魂を帰そうとするが、どうしても魂は帰らず、死者たちが文字どおり蘇る(よみがえ)、すなわち死の国から帰らないことがわかると、そこで初めて、諦めて死者を葬るのである」

処置をして家族のもとへ遺体を帰す。それは、海外で体から離れ出てしまった魂を日本へ呼び戻す儀式ではないだろうか。彼らの国際霊柩送還とは、亡き人に戻ってきてほしい、甦(よみがえ)ってほしいという遺族の切なる願いをかなえるための「魂呼び」なのである。遺族は遺体に呼びかけ、遺体にすがって泣く。やがていくら望んでも甦らないことを悟り、はじめて魂をあの世へと送ることができるのである。だから魂の戻ってくる場所として、遺体に最大限の処置をする。それがエアハースの処置の意味なのだと思う。

いくら処置をしたところで、死者が甦ることはないと遺族も知っている。知っていても、なかなか愛する人の死をあきらめられない。日本に魂を呼び寄せ、その人は帰らないことを知ってはじめて、遺族はその人をあきらめることができるのではないだろうか。だからこそ震災時に身内が行方不明になってしまった家族や、戦時中に海外で家族を亡くしてしまった人は、はぐれてしまった魂を家に連れ帰ることができないと悲しむのである。

だが、あえて処置をする前のままの姿で連れて帰りたいと望む遺族もいる。

ある日、空港で処置前の姿のまま息子に会わせてほしいと泣く母親がいた。

彼女の息子は海外で強盗に遭い命を奪われ、空港に帰り着いた。遺体は殺害されてしばらく発見されなかったため、損傷がひどく、変わり果てていた(イ)腐敗臭も激しく、体液も漏れている。海の向こうで死後彼が経てきた時間を感じざるをえなかった。

利恵は、処置前の遺体をそのまま帰すことには反対していた。

「お父さんとお母さんが望むなら、今の状態の息子さんのまま帰してもいい。だけどきっと、息子さんは親戚やお友達と会ってお別れが言いたいと思うよ。息子さんはさあ、今の自分の悲しい顔を記憶しておいて欲しくないと思うんだ。彼はみんなの記憶の中で、これから生きていかなきゃならないんだよ」

だが、母親はどうしても処置前の顔のまま帰してほしいと言う。

「あの子がどんなに変わり果てた姿であってもかまわない。最期にどんなことを叫び、誰に助けを求めたのか。私はありのままの事実を息子から聞いてやりたい」

そう言って聞かないのだ。

エアハースの処置を見た後は、私は利恵の意見に賛成してしまう。彼らの処置を知っている人間ならそう思うだろう。理屈ではない。時間の経過による遺体の変質を見てしまえば、それを何とか元に戻してあげたいと願う。そのままの死は臭いを放ち、その顔を変色させる。それは愛する人さえ遠ざけてしまうからだ。

しかしその一方で、処置は真実の死を覆い隠すという側面も持っている。

かつてNHKで大河ドラマなどを製作し、現在もフリーでテレビドラマや映画を作り続けているプロデューサーの[a]草分け的存在、近藤晋（こんどうすすむ）が新聞に寄せていたあるできごとを思い出す。

それは第二次世界大戦の終戦前、彼が一五歳の頃の話だそうだ。

空襲のあった神戸の街は焦土と化し、土を掘れば黒こげの遺体がゴロゴロ出てきたという。最初は驚いていたものの、そのうちに少年であった彼も遺体に慣れてしまいそれを片付けることが何でもなくなってしまった。そんなある日、彼が学徒動員で土木作業をしていたところ、トタン屋根がどこからか飛ばされて道端に落ちているのを見つけた。

なにげなく彼がそれを撥ね上げると、そこから自分と同じ年ぐらいの少年が出てきたという。熱せられた屋根の下で瞬時に蒸し焼きになったのだろう。体から溶けだした脂で、白い半透明な蠟のようになった少年が、よつんばいの格好で死んでいたという。遺体に慣れていた彼も驚き、思わず後ろに飛びのいた。彼はとっさにそれを行方不明になってしまった友人なのかと思ったという。少年の目は前方を見据え、前にさしのべられた手はどこかを目指したままの形で固(ウ)まっている。その少年が、どこへ行きたかったのか、誰と会いたかったのか。彼はいまだにその姿が忘れられないというのだ。

近藤にとってそれこそが、偽らざる本物の「死」であり、それが本物の「戦争」であったという。

少年は這ってどこかへ行こうとしたままの姿で亡くなった。もしかしたら母親のもとへ行こうとしていたのかもしれない。その口は、母を呼ぶ形に開いていたのかもしれない。

「果たしてその姿を見たことが幸か不幸か、わからないのですが・・・」

彼は私に語る。

「ひとつ言えるのは、(2)この遺体を見たことが、明らかにその後の僕の人生に影響を与えているっていうことですよ」

戦後の自由な空気の中、ドラマや映画の世界に没頭したのは、その少年と出会ったことと関係がないとは思わないと言うのだ。彼はかつて鶴田浩二が演じる、特攻隊の生き残りであるガードマンを主人公にした『男たちの旅路』を制作している。戦後六〇年が経った現在でも、近藤をいまだに動かし続けるのは、その半透明な皮膚をした少年だ。

もし、その少年がきれいに姿を整えられて、微笑んだ姿で柩の中に(エ)納められていたとしたら、それは遺体が伝えようとした本当のことから離れてしまう。「戦争」の中の「死」の本当の姿を覆い隠すものだろうと彼は言う。

成田空港でそのままの遺体と対面したいと望んだこの母親もまた、息子が最期に知った無念や絶望を、そのままの形で知りたかったのかもしれない。いったい彼が現地で何をされたのかを、その目に焼きつけたいと思ったのだろう。(3)そのあまりに強い思いに

利恵はもらい泣きした。

しかしその時は父親が処置を望んだ。

「あいつだって、いつもの顔でお前とお別れしたいだろう。みんなにも会わせてやりたいじゃないか」

「それでも、もとのあの子のままでいいの」と何度もつぶやく母親の肩を抱き、父親はじっと処置が終わるのを待っていた。結局その母親は父親とともに、処置後の遺体に付き添[オ]って自宅に帰っていったという。

「中略……作者は海外援助活動で命を落とした青年（前述の青年とは別人物である）について書き、それを公表したいと考えていたが、母親の承諾を得られないことから、作者はその母親に会いに行った。」

午後、再び家の前に立つ。硝子戸（がらすど）から見える遺影と三度目の対面をすると、自然とため息がもれた。

「ごめんください」

声をかけると、今度は中から気配がして母親が姿を見せた。彼女のその顔を見て、お別れ会での消えてしまいそうなほど小さな喪服姿を思い出した。私はその瞬間すべてをあきらめようと思った。

私は深く頭を下げると、彼女にこう言った。

「しつこく原稿の確認をお願いしてすみませんでした。今日は、そのことを謝りに来ました」

すると、暫（しばら）く母親は驚いたように私の顔を見ていたが、

「まあ、まあ。東京から？遠いところからようこそ。さあ、上がっていってください」と、私を中へと上げてくれた。仏間にはたくさんの新しい花が供えてある。彼の友人が送ってきたのだろうか。彼の志を讃（たた）える記事がいくつか飾ってあった。私は線香に火をつけると彼に手を合わせた。[4]私は覚悟の足りない人間だ。心の中で自分のふがいなさをなじる。

母親は丁寧に手をついて私に頭を下げる。

「すみません。あんなに立派に書いてくださったのに、何度も、何度も、お断りして・・・・・・・」

私は（　　）してしまう。

「こちらこそごめんなさい。つらい思いをされているのに、無理を申し上げました」

彼女は冷たいお茶を私に勧めると、おしぼりを渡してくれる。私が手をふいていると、彼女はとつとつとこう話してくれた。

「時間が経つとねえ。もうちょっと悲しくなくなるかと思ったんですよ。でもね、時間が経つほどつらくなりますねえ。悲しくて、悲しくて、しかたがないですよ。あの原稿を読むと、もう、つらくて、つらくて・・・・・・・」

「わかります・・・・・・」

家の中は静かだった。古い家の中にはいくつもの遺影が飾られている。どれも年配の人ばかりだった。だが、その中で彼だけが若いままで微笑んでいる。

やはり私が書いたものを読んではくれたのだ。「読めない」という意味が私にはその時よくわかった。優しい人柄の母親が、私に示した精一杯のＮＯだったのだ。

その後、母親は「食べなさい」と私に和菓子を勧め、よく冷えたパイナップルジュースを勧め、アルバムを持ちだしてきて彼のことを話して聞かせてくれた。話は尽きない。職場でどれほどみんなに好かれていたか、どれほど親孝行であったか、彼が海外援助を行っていた場所で現地の人がいかに彼を慕っていたか。まるで私と、母親、そして亡くなった彼がいて三人で卓を囲んで話をしているようだった。私はそのエピソードを聞きながら、彼女の記憶の中から最もつらかった時の記憶、つまり遺体で帰ってきた時の記憶が削除され、楽しくて、幸せな記憶へと再編集されつつあることに気づいていた。

懐かしく、愛しい息子の記憶の中に、エアハースの姿は出てこない。

遺族にとって、利恵たちと出会ったのはまさに地獄に仏の心境だろう。だが、だからこそ、彼女たちの顔を思い出すと胸を引

き裂かれるような悲しみの記憶が甦ってきてしまう。

国際霊柩送還士たちにとって、亡くなった人と最も近い一日がある。それが遺体が帰ってきた日だ。彼らは処置をしながら懸命に声を聞き取ろうとする。その人の人生。その人の人柄。その人の伝えたかったこと。どんな姿で家族のもとに帰りたいか。いつも、どんな髪型を好み、どんな笑顔をしていたか。そして家族に何を伝えたいか。

その一瞬、亡くなった人は利恵たちにとって、恋人よりも、家族よりも、ずっと近い人になる。アメリカではエンバーマー[※注2]は神父や牧師の次に尊敬される職業であると聞く。しかしどれほど利恵たちの仕事が遺族の心を救ったとしても彼らのことを讃える声を聞くことはない。遺族は人生で一番つらい記憶を忘れようとするからだ。

無理もない。もし私が子どもを運んでもらったとしたらどうだろう。

私は利恵たちに、感謝して、感謝して、心の中で手を合わせ、きっと彼らを忘れるだろう。そして二度と思い出すことはない。

私は利恵たちに会ったことを忘れ、彼らの名前も顔も忘れ、子どもが亡くなったことすら忘れ、その子との幸せだった記憶だけを繰り返し、繰り返し、思い出す。最初に歩いた日のこと、最初に「ママ」と言った日のこと、抱きあげた時の髪のひなたのにおい、首に回した手の小ささ、泣きべそをかいて走っていた運動会のかけっこ、小学校の入学式、親子げんか。そして「行ってきます」と家を出たときの笑顔・・・。どんなにささやかな記憶でもそれをかき集め、寝る前にはひとつ、ひとつ、思い出す。

私はそう思うと、ふいに安堵(あんど)の気持ちに襲われた。

ああ、これでいいのだ。

私は初めて国際霊柩送還士の本当の仕事を知ったような気がする。[(5)]国際霊柩送還士は忘れられるべき人たちなのだ。裏方として彼らは一瞬、人の最もつらい現場に立ちあい、そしてまた裏方として人の目に触れない場所へと戻って行く。

利恵はかつてこう言っていた。

「私の顔を見ると悲しかった時のことを思い出しちゃうじゃん。だから忘れてもらったほうがいいんだよ」

エアハースは遺族にとって一番いい形で亡くなった人を連れて帰ることができたのだ。だからこそ、遺族はエアハースを忘れることができるのだろう。いつか亡くなったときの一番つらい記憶は薄れ、一番いい思い出とともに遺族は亡き人を思い出す。亡き人の心優しいエピソードを聞きながら、利恵たちが遺族に贈ったささやかな希望が確かに息づいていることを感じた。

（佐々涼子「エンジェルフライト」）

※注1　『記紀』……『古事記』と『日本書紀』を指す。日本神話や古代の歴史を伝えている歴史書である。

※注2　エンバーマー……本文の国際霊柩送還士と同様、遺体の消毒や防腐処置、修復・化粧などを施す医学的・科学的技術者

問9 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、各群①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 14 ～ 18

(ア) 希求する　14
① ヤッキになって頑張った　② ガソリンはキハツ性が高い
③ 志望動機がキハクだ　④ スウキな運命だった

(イ) 腐敗臭　15
① 会社の再建にフシンする　② あいつはフシンな行動をとる
③ 相互フジョの精神　④ 鉄道をフセツする

(ウ) 固まって　16
① 首筋がコウチョクしている　② 細かい事にコウデイしない人
③ 湖の水がコカツする　④ 自分の考えにコシツする

(エ) 納められて　17
① 社会にホウシする　② 薬のコウノウを記してある
③ スイトウ簿を保管する　④ 校舎をカイシュウする

(オ) 付き添って　18
① 青のランプがテントウした　② ベッテンの資料を見る
③ ゲンテンから引用する　④ 不足分をホテンする

問10　波線部a～cについて、各問いに対する答えとして最も適当なものを、それぞれ①～④のうちから一つずつ選びなさい。

解答番号は 19 ～ 21

【波線部a】「草分け的存在」とあるが、これを言い換えた言葉として最も適当なものを一つ選びなさい。 19

① 専門家　② 先駆者　③ 異端児　④ 請負人

【波線部b】「私は（　　）してしまう」とあるが、空欄（　　）には、「相手に対し申し訳なく、身のすくむような思いを抱く」という意味の言葉が入る。この空欄に当てはまる言葉を一つ選びなさい。 20

① 当惑　② 恐縮　③ 焦燥　④ 畏怖

【波線部c】「地獄に仏」とは、どのようなことを喩(たと)えた言葉か。最も適当なものを一つ選びなさい。 21

① 迷っている時に、必要なものや条件がたまたま具合よく整うこと

② 元々世の中は、不運と幸運が交互に訪れるようになっていること

③ 一つの災難を乗り越えたら、また新たな災難に出会ってしまうこと

④ 非常に苦しい状況の下で、思いがけず助けてくれる人が現れること

問11 傍線部(1)「魂呼び。私は、彼らの姿に名をつけるとするなら、この呼び名がぴったりと合うような気がするのである」とあるが、作者はエアハースの仕事のどのような点を指して「魂呼び」と感じているのか。その答えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 22

① 遺体を完璧な姿で復元し保存していくことによって、魂を死の世界に導こうとしている点

② 遺体を修復することによって、命を蘇らせることができると信じて死者の魂に呼びかけている点

③ 遺体を国内に戻すことによって、死者と縁の深かった人々の魂を身近に呼び寄せようとしている点

④ 遺体に言葉をかけ生前と同様の姿に修復することによって、魂が心安んじて戻れるようにしようとする点

問12　傍線部(2)「この遺体を見たことが、明らかにその後の僕の人生に影響を与えているっていうことですよ」とあるが、この部分で、近藤晋氏はどのようなことを述べているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 23

① 戦火の中で死んだ少年の意思を継ぐことを運命と思い、ドラマや映画の世界で生きることを決意したということ

② 戦時下で見た少年の遺体が脳裏に残り、それを振り払うためにドラマや映画の世界に身を投じていったということ

③ 戦火の中で死んだ少年の姿を見て、限りある命の輝きをドラマや映画で表現したいと考えるようになったということ

④ 戦時下で少年の遺体を直(じか)に見たことによって、その後、戦争の実相をドラマや映画で表現する道へ進んだということ

問13 傍線部(3)「そのあまりに強い思いに利恵はもらい泣きした」とあるが、「利恵」はなぜ「もらい泣き」したのか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 24

① 息子の死を冷静にとらえられず、これからも心取り乱したまま生きていく母親の姿を切ないものと感じたから

② 息子の死という絶望から救ってやりたいと願う利恵たちの気持ちが、母親に届かないことに空(むな)しさを覚えたから

③ 息子の死から目を背けず、息子の苦しみまでも一生背負っていこうとする母親の健気(けなげ)な覚悟が胸に刺さったから

④ 息子の死を在りのままに受けとめることによって、新たな一歩を踏み出そうとする母親の悲愴(ひそう)な決意に共感したから

問14 傍線部(4)「私は覚悟の足りない人間だ。心の中で自分のふがいなさをなじる」とあるが、作者がこのような思いにとらわれたのはなぜか。その理由を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 25

① 海外で命を落とした人のことや国際霊柩士の仕事ぶりなど、多くの人にその真実の姿を伝えるのが、ジャーナリストとしての自分の使命であるという思いを抱きながらも、今も悲しみの中にいる遺族を目の当たりにして、その思いを貫けなかったから

② 海外で命を落とした人のことや国際霊柩士の仕事ぶりなど、自分なりに取材の限りを尽くしてきたはずだったが、最も大切にすべき、遺族の感情を十分に理解できていなかったことに気づき、ジャーナリストとしての自分自身の未熟さに思い至ったから

③ 海外で命を落とした人のことや国際霊柩士の仕事ぶりなどを在りのままに伝えたいと思っていても、遺族から拒絶されたからには、書くことを断念するのがジャーナリストとして取るべき道だと知りつつも、今一つ割り切れない自分を情けなく思ったから

④ 海外で命を落とした人のことや国際霊柩士の仕事ぶりなどを伝えることがジャーナリストの使命だと思って取材してきたが、結局、自らの力不足で十分な原稿が書けないまま公表を断念したことで、今も悲しみの渦中にいる遺族を救ってやれなかったから

問15 傍線部(5)「国際霊柩送還士は忘れられるべき人たちなのだ」とあるが、これはどのようなことを指しているのか。その答えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 26

① 時が経っても、大切な人を失った悲しみは癒されることはないので、遺族は死に直面した時の記憶が甦ることがないように、国際霊柩送還士の存在を自らの心の中から消し去ろうとすること

② 時が経つにつれて、遺族の心の中に失った家族と過ごした大切な思い出が甦り幸せな記憶がつくられていくとき、国際霊柩送還士の姿も含めて、死に直面した時の記憶は自ずと消えていくこと

③ 時が経ち、遺族の心に死に直面した時の記憶と過去の幸せな思い出が溶け合ってつくられていくとき、以前は遺族にとって大切な存在であった国際霊柩送還士は自ずと忘れ去られてしまうこと

④ 時間の経過とともに、大切な人を失った悲しみは自ずと癒されていくが、そのことと併せて、国際霊柩送還士の献身的な姿も、死者の生前の思い出と共に、遺族の記憶の底に沈められていくこと